

特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士が実践する 「寄り添う」介護における考察

田中 真佐恵*

要約

本研究は、特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士は実践の中で、「寄り添う」介護をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とした。介護福祉士9名から半構成的面接調査で語られた内容を質的に分析した。その結果、8つのカテゴリが抽出された。カテゴリは【うまく表現できない入居者の思いを理解し、対応すること】【表面からは見えにくいその人らしさを多角的に理解すること】【自宅とは違う環境の中で、入居者と家族の関係を整えること】【入居者に関わる時間や空間、心の距離を測ること】【介護福祉士自身が、高齢者との関わりの意味を感じる】【自宅とは違う環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること】【入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと】【多職種とともに話し合い、入居者に関わる】であった。

キーワード：寄り添う、介護福祉士、特別養護老人ホーム

2014年9月30日受理（実践研究）

I. はじめに

わが国の急速な高齢化に対応するために、1987年に介護福祉士は誕生した。その約10年後に介護保険制度が成立し、2012年の介護職員数は全国で168.6万人¹⁾になっている。このうち介護福祉士有資格者の割合は37.6%²⁾であり、上昇傾向にある。しかし、高齢者数がピークに達する2025年までには推計約230万人³⁾の介護職員が必要とされており、介護人材の量的確保は必須である。そして、量のみならず、質的確保の取り組みを進めていくことが重視されている⁴⁾。とりわけ介護福祉士について、その専門性と社会的評価の向上に取り組む方向性が厚生労働省から示されている⁵⁾。

では、介護福祉士の専門性とはどのような点なのだろうか。「求められる介護福祉士像」⁶⁾としての12項目は示されているが、その内容は漠然としている。そこで、「尊厳」や「自立支援」などの抽象的な意味を介護福祉士の実践から解釈し、より具体的に示していく必

要があると考えられる。

本研究では介護福祉士がよく使用している「寄り添う」介護に着目した。この「寄り添う」介護は、介護実践現場でよく耳にする言葉である。また、雑誌や書籍のタイトル、特集記事として散見されている。しかし、社会福祉士としての実践から吉田⁷⁾が「寄り添う」ことを分析しているが、その他文献はなく、明確な定義もない。また筆者は、吉田⁸⁾が明らかにしていること以外に、介護福祉士が使用している「寄り添う」介護には様々な内容が含まれているように感じている。

そこで、介護福祉士の実践から「寄り添う」介護とはどのようなものを明らかにすることにした。

II. 研究目的

特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士は、実践の中で「寄り添う」介護をどのように捉えているのかを明らかにすることが目的である。

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：田中真佐恵
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科
E-mail：m.tanaka@kenko-fukushi.ac.jp

Ⅲ. 用語の定義

1. 特別養護老人ホーム

介護保険法の施設サービスに基づく3施設（介護老人福祉施設・介護老人保健施設・介護療養型医療施設）のうち、「介護老人福祉施設」のことを指す。特別養護老人ホームでは、他の介護保険施設に比べ生活支援をより中心とした介護を目的として設置されている。そのため、他の2施設に比べ看護職員の割合が低く、24時間の生活の場を主に介護職員が支えている。

本研究では、このような背景から特別養護老人ホームの介護福祉士を対象とした。

2. 寄り添う

広辞苑によると「そばへよる・よりつく」であり、「添う」とは「そばに離れずにいる」という意味である。

英訳は、cuddle（愛情を持って寄り添う）cuddle up to（～にぴったり寄り添う）、snuggle up to（～に寄り添う）などが、「そばへよる」という意味に近い。

大西⁹⁾は、closelyと訳し、「介護老人福祉施設で看取りに携わる介護職員の態度に関する研究」の中で、「高齢者の感情に気づくことが寄り添うケアにつながる」と述べている。

前述の吉田¹⁰⁾は、Drawing closeと訳している。社会福祉士としてクライアントの気持ちに「寄り添う」ことを分析し、「その人の経験している『自分の現実』を理解すること」とし、「相手の『自分の現実』を理解するためには、自分の気持ちと相手の気持ちを受け止めること」と述べている。

いずれも介護福祉士の実践における「寄り添う」という語句を説明しているものはなかった。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究対象者

A府下の特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士9名。介護福祉士は、勤務経験が5年以上とした。

特別養護老人ホームの施設長等に紹介を受けた介護福祉士に、個別に研究協力の意向を確認した。

2. 調査方法

半構成的面接調査を、研究対象者1名につき各1回実施した。

質問内容は、①生活を支える介護実践だったと特に実感できた事例について②寄り添うことが出来たと思う事例についてである。面接は個室で行い、場面を具体的かつ自由に語ってもらった。研究対象者の同意を

得て面接内容をICレコーダーに録音した。

3. 調査期間

2014年7月～8月

4. 分析方法

半構成的面接のデータから逐語録を作成した。逐語録は、研究対象者に確認してもらった。その後、逐語録の中で、「①生活支援の中で特に大事にしていること」「②寄り添う実践とはどういうことか」が具体的に述べられ、かつ①と②が一致していると解釈できた部分を抜き出した。前後の文脈にも注意しながら、解釈の吟味を繰り返し行い、類似したラベルを集め、サブカテゴリ、カテゴリを生成した。

分析過程においては、質的研究法の経験豊かな研究者にカテゴリ化の確認を受け、逐語録にもどりながら解釈に対する妥当性・信頼性を確認した。

Ⅴ. 倫理的配慮

対象者が所属する施設の施設長等に対して、研究の趣旨と目的を文書で説明し、研究協力の依頼をして了解を得た。また紹介を受けた介護福祉士に対して、研究の趣旨と目的、研究の協力は任意でありいつでも研究協力者の意思で撤回することができること、そのことにより何ら不利益を受けることはないこと、面接調査日時や場所は協力者の希望に添うこと、所要時間について、正しい回答や間違った回答というものはないこと、個人情報保護すること、調査内容は研究目的以外には使用しないことを文書および口頭で説明し、研究協力の同意を得た。

Ⅵ. 結果

1. 対象者の概要

対象者9名（4施設）は男性5名、女性4名で、概要は表1に示すとおりである。年齢の幅は、20歳代～40歳代。介護福祉士としての経験年数は、8～26年であり、平均12.7年であった。現在の特別養護老人ホームでの経験年数は、1～19年で、平均10.9年であった。

また、9名のうち7名が介護管理者（主任を含む）であった。

介護福祉士資格取得については、6名が養成校卒業者であった。

表1 対象者の概要

| 研究対象者 | 性別 | 役職 | 年齢(歳代) | 介護福祉士としての経験(年) | 現在の特養での経験(年) | 資格取得方法 |
|-------|----|--------------|--------|----------------|--------------|--------|
| A | 男性 | 介護管理者(主任を含む) | 30 | 15 | 15 | 養成校 |
| B | 女性 | 介護管理者(主任を含む) | 40 | 26 | 19 | 実務経験 |
| C | 女性 | 介護管理者(主任を含む) | 40 | 10 | 17 | 実務経験 |
| D | 女性 | 介護管理者(主任を含む) | 30 | 18 | 13 | 養成校 |
| E | 女性 | 介護管理者(主任を含む) | 20 | 8 | 8 | 養成校 |
| F | 男性 | 介護管理者(主任を含む) | 30 | 10 | 10 | 養成校 |
| G | 男性 | スタッフ | 40 | 8 | 1 | 実務経験 |
| H | 男性 | 介護管理者(主任を含む) | 30 | 11 | 11 | 養成校 |
| I | 男性 | 教育担当 | 30 | 8.5 | 4.5 | 養成校 |
| | | | (平均) | 12.7 | 10.9 | |

表2-① 特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士が実践する「寄り添う」介護

| カテゴリ | サブカテゴリ | ラベル |
|-------------------------------|---|--|
| 【うまく表現できない入居者の思いを理解し、対応すること】 | <その人の立場に立って、その人が望むことを考え、対応すること> | <ul style="list-style-type: none"> 《その人が本当に生活できるようにと、自分の気持ちに置き換えながら考える》 《希望をかなえたいが、無理なときは難しいと思っている》 《長く生きている方なので、本人が「こうしよう」という部分に対応する》 《おなかをさする、好みの湯の(温度に)合わせるなど、その人の立場で気持ちを考えてながら毎日のケアを継続する》 《自分達の当たり前ではなく、相手の価値観をすり合わせる》 |
| | <その人の話を真剣に聴き、思いを受けとめること> | <ul style="list-style-type: none"> 《(軽度認知症の方の)プライドを傷つけないように、生活の環境を毎日(整える)》 《本人が必死に訴えることに、必死に答える》 《認知症の方の思いを無視せず、嫌がらないケアをする》 《いいたいことを言う利用者を受けとめる》 《わがままであっても当然である。訴えを全部その時に聞く》 《本人だけでなく、家族でも職員でも真剣に話を聞く》 《毎日その方と対応して、今日の気持ちを測りながら対応していく》 《その日を必死に生きていることを感じながら支える》 《ちょっとした時間にその方の話を聞いて、同じ思いでいるようにする》 |
| | <ちょっとしたことであっても、高齢者にとっての今を大事にすること> | <ul style="list-style-type: none"> 《認知症の方がちょっとしたことを覚えていたり、感動したりすることが(そんなちょっとしたことが)嬉しい。利用者の今を大事にする》 《高齢者にとって今が大事なので、その時にできる最大の事をする》 《本人とゆっくり話をしながら、(表面に)見えないところの支援を行う》 《外と遮断している環境でもあり、他人である介護職員には言えずに秘めていることもあるので、そこをちょっと開放できるようにする》 《障害がある方のコミュニケーションの橋渡しをすることで、孤独な生活の刺激になるようにする》 |
| | <病気や施設という環境のために普段は言えない気持ちを引き出して、代弁すること> | <ul style="list-style-type: none"> 《認知症などで、うまく表現できない方々の気持ちを引き出して代弁していく》 《大きなことをするのではなく、普段は言わない一言が聞きだせるようにする》 《食べられないことについて、「よくなれば可能」と(見通しがもてるように)説明し、納得していただく》 《無理なことは「話だけは聞いておく」と伝え、納得できるようにする》 |
| | <本人と一緒を考え実行し、喜んでいただけるようにすること> | <ul style="list-style-type: none"> 《寂しいこともあるので、施設で楽しく生活できるようにする》 《利用者ができること、喜ぶことを考える》 《利用者の立場に立ち、利用者喜んでいただけるようにする》 《入居者が希望していることについて(介護福祉士が)本人と一緒に考えて実行し、喜んでいただけるようにする》 |
| 【表面からは見えにくいその人らしさを多角的に理解すること】 | <その人を理解して、その人のためにどうすればいいかを考えること> | <ul style="list-style-type: none"> 《好みや姿勢などについて、その人固有のマニュアルを作る》 《日々の積み重ねからきちんとしたアセスメントを行う》 《ターミナル期で、本人が喜ぶ一番最期はどうかを考える》 《その人を理解して、その人のために(どうすればいいか)を考える》 《その人の今までの生活、家族のことを把握して、その人が思っていることを解釈する》 《決まった正解がないので、失敗でもいいと思いつつ相手を知るために働きかける》 |
| | <長い人生の経過や今までの生活を大事にする> | <ul style="list-style-type: none"> 《長い経過がある(方々)なので、その代弁ができ、人生のステージに関わるようにできるようになる》 《施設で我慢されているので、今までの生活を聞き、できるようにする》 《昔やっていたことが役割としてできるようにする》 《家で好きなときに出かけていたが施設では出来ない、できることをする》 |
| | <病気を見るのではなく、意思疎通が困難だから行動・動作を観察し、その人の思いを理解するように聴く> | <ul style="list-style-type: none"> 《本人の生きてきた歴史を知っていき、家族関係も知っていく》 《最初にどうしたいのか、その人の思いを知る》 《どういう気持ちで訴えているのかを見るように、掘り下げて話をする》 《認知症の方と理解し合えるようになりたいと思う》 《病気を見るのではなく、その人が安心できるようにその人自身を見るようにする》 《声にならない声を拾うために観察する》 《理解力低下、意思疎通が困難だから行動・動作を観察する》 |
| | | |

2. 「寄り添う」介護について(表2-①、表2-②参照)

特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士が実践している「寄り添う」介護は、8つのカテゴリから形成されていた。それは【うまく表現できないその人の思いを理解し、対応すること】【表面からは見えにくいその人を多角的に理解すること】【自宅とは違う環境の中で、入居者と家族の関係を整えること】【その人に関わる時間や空間、心の距離を測ること】【介護福祉士自身が、高齢者との関わりの意味を感じる】【自宅とは違う環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること】【入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと】【多職種とともに話し合い、入居者に関わる】というカテゴリであった。

それぞれのカテゴリごとにその内容を説明していく。

1) カテゴリ【うまく表現できない入居者の思いを理解し、対応すること】は6つのサブカテゴリから形成されていた。以下、順番にサブカテゴリを説明する。サブカテゴリを<>で示す。

(1) <その人の立場に立って、その人が望むことを考え、対応すること>

H氏は、「(普段の業務の中では) タイムテーブルの中に利用者さんが入ってくるような感じで。ご飯の時間やったらご飯って。その中でも、入居者さんがこうしたいという部分は絶対に出てくると思うんですけど。そこをシフトの中からずれるからせえへんってい

表2-② 特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士が実践する「寄り添う」介護

| カテゴリ | サブカテゴリ | ラベル |
|-----------------------------------|---|--|
| 【自宅とは違う環境の中で、入居者と家族の関係を整えること】 | <自宅とは違う環境の中で、家族に近い関係になること> <本人と家族の関係を崩さないように、維持できるように働きかけること> | <今までとは違う空間の中で、家族に近い状態になる> <ターミナル期で家族がいなければ、介護職員がそばにいる> <身内も誰もいない方の最期を看取る> <一線は引きつつ、家族のような関係で安心してもらえるようにする> <介護職員は各々の家族の考えや価値観に口を出さない> <家族と仲良く会っていただけの環境を作る> <大きなことはできないが、些細な働きかけによって家族に安心していただけるようにする> <生活の中で潤いがもてるように、家族との関わりをもっといただく。(ただし、家族に重荷にならないように気をつけながら行う)> |
| 【入居者に関わる時間や空間、心の距離を測ること】 | <その人に関わる時間や空間、存在を近くに感じてもらえる心の距離を測ること> | <入浴の一連の介助を1対1ですべて行い、変化にすぐに対応できるようにする> <認知症の方が安心できる関係性を、探り探り作る> <一緒に行動するよりも距離を置いたほうがいい人もいますので、その人との距離を考える> <例えば「の」字マッサージなど、その人に関わる時間を大切に> <業務から離れても「どうしてるかな」とその人のことを思う> <初めは隣に座ったり、存在を近くに感じてもらうという距離を測る> <「一つの空間にいるから安心」という、利用者にとって安心できる距離を測る> <介護職の経験年数ではなく、その人と過ごしその人のことをわかっていく時間を過ごす> |
| 【介護福祉士自身が、高齢者との関わりの意味を感じる】 | <関わりの積み重ねから見える入居者のちょっとした反応を「嬉しい」と感じる> <高齢者の器の大きさを実感し、「学ばせてもらっている」と感じる> | <毎日のかかわりの積み重ねで、利用者の微細な反応があり嬉しいと感じる> <ちょっと外出したときに見られる(利用者の)喜んだ顔が嬉しいと、感じる> <介護職員を抱きしめてくれる100歳以上の方の器の大きさ、すごい力を実感する> <手伝ってあげる感覚ではなく、高齢者から学ばせてもらっていると感じる> <実は利用者から支えられている。亡くなった人が最期に教えてくれたことを、今後のケアに活かす> |
| 【自宅とは違う環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること】 | <自宅とは違う施設という環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること> | <自分の体が思うようにならず、知らない人ばかりの施設だから、安心感をもって頂くようにする> <職員が一人ひとりにしっかり関わることが難しい環境だから、不安や寂しさを緩和できるようにする> <「寂しい」と言われる方がいる。だから、安心感を持っていただけるようにしている> <ターミナル期で、好きなもので安心できる環境をつくる> |
| 【入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと】 | <入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと> | <例えば排泄のタイミングをデータに基づいて予測し、トイレでの排泄ができるようにする> <家族に聞いて好きなものを食べていただき、体調が回復するようにする> <ターミナル期で、好きなものを食べて人生が全うできるようにする> <しっかりした観察をして、ちゃんと食事を食べていただけるようにする> <その人のタイミングに合わせるようにして、食事介助のリズムを大事にする> <他の職種の方と相談して、食事が摂れるようにする> |
| 【多職種とともに話し合い、入居者に関わる】 | <介護職として医療的な視点でよく観察し、医療職とともに入居者に関わる> <その人にとって最善と思うことは何かを、多職種で話し合うこと> | <認知症の方へ、医療と統一した方法で関わる> <すぐに医療に頼るのではなく、よく観察して医療につなぐ> <早い対応ができるように、(変化に対して)医療的な視点で見られるようにする> <各々がしっかりした軸を持って、(役割分担の中で)皆で支えていく> <その時に最善と思われることを皆で出し合っていく> <その方の行動を皆で話し合い、記録を積み重ねていって解釈する> |

うのは避けたいですからね。僕らより何年も長く生きてはる方なのでっていうのは大前提にはおいて動くようにはしてます」と、長く生きている方なので本人が「こうしよう」という部分に対応していることを語っていた。

I氏は、「その方のそばについてお腹をさすったりとか、(中略)やっぱり排便がなくて不安な気持ちで職員に、ナースコールとかで呼ばれりするんで、その人の話を聞きながら「なんででーへんのやろうなー」って言いながらマッサージするっていうのは、その人の立場にたつて。(中略)その人の気持ちを考えながら」と、その人の立場で気持ちを考えながら毎日のケアを継続していることを述べていた。

(2) <その人の話を真剣に聴き、思いを受けとめること>

C氏は、「やっぱり利用者さんが嫌がらないケアをと。それがやっぱり今でこそ思えること。認知症のことも勉強させてもらって、(中略)一生懸命仕事の流れをやってきたつもりやねんけど、なんか利用者さんの思いを無視してないかなっていうのを感じとった。昔は(中略)お世話させてもらってるっていう様な格好やったんですけど、なんかそうじゃないっていうような(中略)できるだけ近づいていくっていう、嫌じゃない介護を出来たらなっていうふうに」と語った。認知症の方の思いを無視せず嫌がらないケアを行うことであり、それは認知症のことを勉強して感じとったということだった。

H氏は、「認知症があったりとか、トイレに行きたいという訴えを、何回も訴えられるっていう場合とかがあると思うんです。(中略)実質業務の兼ね合いもあって、すぐにはできんこともあるにはあるんですけども。入居者さんはここで生活をしている以上はわがままがあって当然やと思うんで、そのわがままもかなえてあげるのが、ここで生活を快適に過ごしてもらうためには」と語っていた。

(3) <ちょっとしたことであっても、高齢者にとっての今を大事にすること>

D氏は、「(認知症のある入居者が)しばらく職員と1階を歩くんですけど、1階の中庭に植えてある木を見て「きれいや」って感動されるんです。いつもはフロアの中で過ごされてて、そんな外に行く機会はないですけど、フロアから降りてきた1階のいつもとは違う場所だから感じるんやなーって思うんですけど。そん

な感動してくれているのを見ると嬉しいんです。(中略)利用者さんの今を大事にする仕事だと思うんです」と、ちょっとしたことであっても今その時の感動を大事にしていることを語っていた。

(4) <病気や施設という環境のために普段は言えない気持ちを引き出して、代弁すること>

I氏は、「視力障害があったりとか、難聴等でなかなか自分と周りの方とのかかわりが少ないという方がおられますので、そういう方にとってどういうふうにしたら孤独感を少なくできるかということ(中略)職員が利用者さん同士の中に入りながらコミュニケーションの橋渡しになろうということ(中略)障害がある方のコミュニケーションの橋渡しをすることで、孤独な生活の刺激になるようにしていることを語っていた。

(5) <本人の気持ちを尊重しつつ、説明し納得していただくこと>

このサブカテゴリは、「食べられないことについて、見通しが持てるように説明し納得していただくこと」などのラベルから形成されていた。

(6) <本人と一緒に考え実行し、喜んでいただけるようにすること>

このサブカテゴリは、「入居者が希望していることについて(介護福祉士が)本人と一緒に考えて実行し、喜んでいただけるようにする」などのラベルから形成されていた。

2) カテゴリ【表面からは見えにくいその人らしさを多角的に理解すること】は3つのサブカテゴリから形成されていた。以下、順番にサブカテゴリを説明する。

(1) <その人を理解して、その人のためにどうすればいいかを考えること>

B氏は、「どういうのが(どういう食べ物)が好みだとか、どれからいったほうがいい(どれから先に食べたほうがいい)とか、座位がこうだからとか、ポジションはPTにみてもらうんですけど、そういう細かいマニュアルが食事に関してはあります。作ったんです。(中略)みんな全量摂取を目標にするから、そうじゃないよね。ここの全量摂取がその人の全量摂取じゃないよねって。(中略)こういう工夫をしてますということ(中略)ケアプランに合わせて入れてしてますって。で、はじめから直感では無理やと思うんですよ」と、日々の積み重ねからアセスメントを行っていることを述べ

ていた。

(2) <長い人生の経過や今までの生活を大事にする>

D氏は、「その人が今まで家でどういう生活をしてきたのかな?って考えています。施設では我慢もしながら生活されていると思うので。(中略)どんなことをされていたのか?趣味とかを家族さんに聞いています。で、それを出来るだけやってみて、できる様になっています」と語っていた。

(3) <病気を見るのではなく、意思疎通が困難だから行動・動作を観察し、その人の思いを理解するように聴く>

F氏は、「やっぱその人っていうのをなるべく見るようにしていますね。どうしても感覚が麻痺してしまうっていうか、特養っていう施設において認知症の方っていう一つのくくりで見えてしまうっていうことがよくありがちやから思うんですけど、やっぱその中に認知症を持っているけどその人の中にこの人っていうところを見ていくようにしたら、利用者さんもこの人は安心できるっていう事をなんとなく感じてもらえて安心できるのかな」と、病気を見るのではなく、その人が安心できるようにその人自身を見るようにすることを語っていた。

3) 【自宅とは違う環境の中で、入居者と家族の関係を整えること】は2つのサブカテゴリから形成されていた。以下、順番にサブカテゴリを説明する。

(1) <自宅とは違う環境の中で、家族に近い関係になること>

このサブカテゴリは、「今までとは違う空間の中で、家族に近い状態になる」などのラベルから形成されていた。

(2) <本人と家族の関係を崩さないように、維持できるように働きかけること>

G氏は、「自宅での介護が困難で入所されたんですけど。ですんでちょっとね、そういう定期的にもし行ったら生活の中に潤いができるのかなと思って。(中略)ご家族のかかわり・・・そうやっぱり、もって欲しかったんですね。(中略)奥さんのことが大好きな方であつたんで。負担でなければ、奥さんの方が・・・出ない範囲で・・・っていうお話はしながら。絶対に重荷にはならないように・・・それは気にしながら・・・してましたけど」と、生活の中で潤いが持てるように家族とのかかわりを持っていただく。ただし、家族に重

荷にならないように気をつけながら行うことを語っていた。

4) 【入居者に関わる時間や空間、心の距離を測ること】は1つのサブカテゴリであった。以下に説明する。

(1) <その人に関わる時間や空間、存在を近くに感じてもらえる心の距離を測ること>

B氏は、「(認知症の方との) 関係性を作っていくのにやっぱり初めは遠いところからで、探り探りで、その言葉言うていいかどうかわからへんけど言ってみようとか。あ、そしたら意外に何も混乱しはれへんかった、っていう中で」と、認知症の方が安心できる関係性を探り探り作っていくことを語っていた。

D氏は、「寄り添うって、どれだけその人のことを理解して、その人のためにということを考えられるか、ということかなと思います。その人のそばにいて、その人と同じことをして、一緒に行動するっていうことも寄り添うっていう事になると思いますけど、その人のことを理解するっていうこと。でも、距離感がむずかしいんですね。その人によっては、あまり踏み込んで欲しくない人もいますから。一緒に行動するっていうのも、距離を置いていたほうがいい人もいて。その人のことを考えてやっています」と、その人を理解することであり、一緒に行動することでもあるが、その人との距離を考えることでもあることを語っていた。

F氏は、「寄り添って一番始めの取っ掛かりっていうのは距離なんかなって思うんですよ。でもその距離っていうのが、実質的な隣にすわるとかっていうことと、存在を近くに感じてもらうっていうこともあるかなって思ってた」と語っていた。

5) 【介護福祉士自身が、高齢者との関わりの意味を感じる】は2つのサブカテゴリから形成されていた。以下、順番にサブカテゴリを説明する。

(1) <関わりの積み重ねから見える入居者のちょっとした反応を「嬉しい」と感じる>

H氏は、「まったくの寝たきりの人でも、耳元で物を言ったりとかするようにはしています。ちょっとでも反応があったら、(中略)そうやってピクっと動いたりしたら「反応したわ」って嬉しかったりするんで」と、利用者の微細な反応があり嬉しいと感じることも「寄り添う」と語っていた。

(2) <高齢者の器の大きさを実感し、「学ばせてもらっている」と感じる事>

C氏は、「私の中で大それたことはできないかなと思ってて。自分らよりももっと先輩の人たちのお手伝いをさせてもらってるんで・・・。(中略)この職種に溶け込んだときに、一番初めは手伝ってあげたらっという。ただもう、「あげたらっ」ていう感覚やっただと思う。ただその中で、いろんな利用者さんと関わっていく中で、学ばしてもらってる感じでは、変わって行ってると思うんです」と、高齢者から学ばせてもらっていると感じることを述べていた。介護に携わった最初は手伝ってあげる感覚が変化したことも語っていた。

6)【自宅とは違う環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること】は1つのサブカテゴリであった。以下に説明する。

(1) <自宅とは違う施設という環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること>

このサブカテゴリは、「自分の体が思うようにならず、知らない人ばかりの施設だから、安心感を持っていただくようにする」などのラベルから形成されていた。

7)【入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと】は1つのサブカテゴリであった。以下に説明する。

(1) <入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと>

A氏は、「例えば果物の中でりんごが一番好きやった。やったら今現在最期まで口で食べさせてあげたっていう家族さんからの要望があったら、そういうふうなりんごを、いかに口で摂取してもらおうかっていうのをいろいろ試行錯誤してて、(中略)まったく食べてなかった人がそれだけは食べて人生を全うされるっていうのを体験したりしてるので」と、ターミナル期で好きなものを食べて人生を全うできるようにすることを語っていた。

その他、このサブカテゴリは、「その人のタイミングに合わせるようにして、食事介助のリズムを大事にする」などのラベルが形成されていた。

8)【多職種とともに話し合い、入居者に関わる事】

は2つのサブカテゴリから形成されていた。以下、順番にサブカテゴリを説明する。

(1) <介護職として医療的な視点でよく観察し、医療職とともに入居者に関わる事>

このサブカテゴリは、「すぐに医療に頼るのではなく、よく観察して医療につなぐ」などのラベルから形成されていた。

(2) <その人にとって最善と思うことは何かを、多職種で話し合う事>

このサブカテゴリは、「その方の行動を皆で話し合い、記録を積み重ねていって解釈する」などのラベルから形成されていた。

Ⅶ. 考察

1. うまく表現できない入居者の思いを理解し、対応すること

(1) <その人の立場に立って、その人が望むことを考え、対応すること>

H氏は、決して業務の流れの中に入居者を組み入れることなく、一人一人の入居者がここに存在していることを特に意識していた。「長く生きている」という言葉は、高齢者の存在を尊重していることが伺える。それは、施設の中では一人ひとりの要望に丁寧に対応することが難しい現実を実感しているからこそ、特に高齢者が望むことを意識しなければと述べたのではない。

I氏は、入居者が「便が出なくてつらい」という思いを察しながら直接マッサージを行っている。これは、身体を近づけ直接手を触れて寄り添うという行為と同時に、入居者のつらい思いに近づいていると言える。

(2) <その人の話を真剣に聴き、思いを受けとめる事>

C氏は、認知症について「深い物忘れ等をもちながら暮らす日々は、想像を超えた不安と不快の連続である¹¹⁾」ということを勉強した。勉強することによって、入居者の思いを受けとめることに気がついた。C氏は以前「お世話をする事」と認識していたが、それが「嫌じゃない介護」に変化した。これは「お世話をする事」が一方通行的なかわりだとなれば、「嫌じゃない介護」は双方向のかわりを指しているのではない。

H氏は、認知症のためであっても、そうでなくても「わがままをいう事も生活しているということそのものだ」と述べている。つまり、介護福祉士は、生活を

単に衣食住だけで捉えるのではなく、様々な視点から見ている。この捉え方が、入居者の言葉を受けとめる姿勢に影響を及ぼしていると考えられる。

C氏やH氏の語りから、入居者の思いを受けとめるには疾病や特別養護老人ホームでの生活の捉え方が関係していることがわかる。

(3) <ちょっとしたことであっても、高齢者にとっての今を大事にすること>

D氏は、今ここで木を見ているその瞬間を入居者とともに感じることを述べていた。日常のほんの一コマの今を大事にしている。他の介護福祉士の語りの中でも、今を大事にすることが重要だと述べているものがあった。これらは、高齢である入居者の日常は有限であると常に意識していることが述べられていた。甘利¹²⁾は「介護施設で暮らすお年寄りにとって、最後の一日も、いつの一日も同じでなければならない」と述べている。また「施設のお年寄りは、日常生活のなかで、確実に近づいてくる死を感じている¹³⁾」だからこそ、介護福祉士は高齢者の今この時の生を大事にしているのではないか。

(4) <病気や施設という環境のために普段は言えない気持ちを引き出して、代弁すること>

I氏は、入居者がコミュニケーション障害による孤独感を感じていることや、施設という環境では日頃ゆっくりと入居者の気持ちを聞くことができないことを実感していた。その方の話を聴くだけでなく橋渡しをするという、まさに周囲の人とのかかわりを保つ視点、社会とのかかわりを重視している。

このカテゴリは、認知症などの様々な障害の特性を把握しているから、入居者の思いを理解することができると明らかにされていた。また、日々のかかわりの今を大事にし、本人の思いに対応している。

2. 表面からは見えにくいその人らしさを多角的に理解すること

(1) <その人を理解して、その人のためにどうすればいいかを考えること>

B氏は、認知症の食事支援では、対象者の食事について「サイエンスの視点・アートの視点・生活リズムの視点¹⁴⁾」の大きな三つの柱での捉え方を山田が説明しているように、人によって支援方法は千差万別である。それを知っている介護福祉士は、例えば食事介助

においても入居者の状態を日々観察しながらアセスメントしている。特にその人にとっての全量摂取は、食事の量の問題だけで決めるのではなく、今この人に必要な食事の質、習慣、文化、体調など多角的な視点で見ることが必要だと解釈できる。

(2) <長い人生の経過や今までの生活を大事にする>

D氏は、これまでの生活の様子や趣味、仕事などを大事にすると述べていた。これらは、介護福祉士養成講座にある「その人らしさとは、生活の中で獲得してきた経験、価値観、生活習慣へのこだわりなど¹⁵⁾」と一致しており、それらの情報を得て尊重することは個別ケア実践の基本である。

(3) <病気を見るのではなく、意思疎通が困難だから行動・動作を観察し、その人の思いを理解するように聴く>

F氏は、前述した疾病の理解とは違う側面で入居者を理解することを述べていた。例えば、「認知症の人だから記憶障害がある」と見るのではなく、「花が好きで、花を見て微笑む人」と見る。パーソンセンタード・ケア¹⁶⁾の「その人の安心・快」の視点、「暮らしのなかでの心身の力の発揮」の視点に通じることである。

このカテゴリでは、入居者の長い人生の中には想像もできないことが様々にある。今、入居者の人生のほんの一部である円熟期にかかっている。だから、多角的に理解するようにしなければ本当にその人らしさはわからないということが明らかにされた。

3. 自宅とは違う環境の中で、入居者と家族の関係を整えること

自宅とは違う空間の中で、介護福祉士が家族に近い状態になるというもであった。しかし、介護福祉士は家族の替わりをすることは述べていない。G氏は、家族の状況を考えて、家族に重荷にならないように気をつけながら家族関係を整えている。

このように、家族がいないときには近い存在になるが、決して家族の存在を無視せず、かつ家族の重荷にもならないようにといった配慮をすることが寄り添うことだと述べられていた。

4. 入居者に関わる時間や空間、心の距離を測ること

(1) <その人に関わる時間や空間、存在を近くに感じてもらえる心の距離を測ること>

B氏は認知症の方との関係性を探りながら作ることを、D氏は入居者の特性を掴んでその人との距離を測っていると語っていた。F氏は隣に座る距離も、すぐ隣にいらなくても存在を近くに感じてもらう距離を意識していた。

3人ともに、距離を測りながら入居者に気持ちを近づけようとしていた。「寄り添う」とは、このように入居者に働きかける行為そのものと、そのプロセスも含まれているようだ。

5. 介護福祉士自身が、高齢者との関わりの意味を感じる

(1) <関わりの積み重ねから見える入居者のちょっとした反応を「嬉しい」と感じる事>

H氏は、入居者の微細な反応を感じることを「寄り添う」と語っていた。

(2) <高齢者の器の大きさを実感し、「学ばせてもらっている」と感じる事>

C氏は、何かをしてあげる関係から、学ばせてもらっている関係に変化したことを述べていた。高齢者とのかわりを通して、その器の大きさや偉大さを実感しており、このように感じ受けとることも「寄り添う」と語っていた。

大西¹⁷⁾は、「高齢者の中に他者を〈労ってくれる〉といった“健康的な面を見出す”ことが必要であるといえる。このような「高齢者の感情に気付く」ことができれば高齢者に寄り添うような看取りケアの実践につながる」ことを明らかにしている。これと同様に、H氏もD氏も高齢者からの反応を受け取っていた。

6. 自宅とは違う環境だからより安心感をもって頂けるようにすること

(1) <自宅とは違う施設という環境だから、より安心感をもって頂けるようにすること>

自分の体が思うようにならず、知らない人ばかりの施設だからと、特に施設の特性を重視していた。

7. 入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと

(1) <入居者の好みやタイミングに合わせた身の回りの支援を行うこと>

A氏は、試行錯誤しながら食べられる食事を試していた。「寄り添う」介護は、食事などの身の回りの支

援の中で入居者に合わせて行う介助を見出すことでもあった。

桑田¹⁸⁾が毎日繰り返し提供されるケアこそ丁寧に行うべきと述べているように、日々のケアを地道に行うことが述べられていた。

8. 多職種とともに話し合い、入居者に関わる

入居者にとっての最善を多職種と連携することも、「寄り添う」ことだと語られていた。大西¹⁹⁾が「話し合うことは、他者の経験を聴き自分だったらというように考える機会になる」と述べていることにつながるのではないかと。

VIII. 結論

特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士が、実践の中で捉えている「寄り添う」介護は以下のとおりであった。

1. 疾病や施設の特徴を踏まえて入居者を理解するという、アセスメントに関する点があげられていた。
2. 自宅と違う環境での家族との関係や身の回りの支援など、日頃のケアを丁寧に行うことがあげられていた。
3. 入居者との距離や時間を測ることとそのプロセス、かわりの意味を感じる事、多職種と連携することなどにも及んでいた。

研究の限界と課題

本研究の限界については、以下の3点があげられる。

- ①対象者が9名であり、対象者から得られたデータ数は十分ではないことがあげられる。
- ②今回の調査はA府に限って実施したが、地域による差が考えられる。
- ③カテゴリ間のつながりまでは考察できていない。以上のことより、今後は、他の地域での調査も行い、データ数を増やし、カテゴリ間のつながりまでを明確にすることが必要である。

謝辞

本研究の調査にあたりご協力してくださいました9名の特別養護老人ホームの介護福祉士の皆様、施設長の皆様に深く感謝いたします。

1. 厚生労働省、介護保険制度施行以降の介護職員数の推移（補正後）、2014年9月22日、http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000056770.pdf
2. 厚生労働省、介護職員に占める介護福祉士の割合の推移（実人数）、2014年9月22日、http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000056770.pdf
3. 厚生労働省、医療・介護に係る長期推計、2014年9月5日、<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/syakaihosyou/syutyukento/dai10/siryou1-2.pdf>
4. 厚生労働省、介護人材確保の方向性について～中間整理メモ～、2014年9月22日、<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaiho-kenfukushibu-Kikakuka/seirimemo.pdf>
5. 前掲4
6. 厚生労働省、介護福祉士制度の見直し、2014年8月30日、<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/04/dl/s0426-5c.pdf>
7. 吉田護昭、2012、「クライアントの気持ちに寄り添うこと」、『川崎医療福祉学会誌』、21-2、pp270-274
8. 前掲7
9. 大西奈保子、2013、「介護老人福祉施設で看取りケアに携わる介護者の態度」、『東都医療大学紀要』、3-1、pp.31-39
10. 前掲7
11. 永田久美子・小森由美子・熊倉祐子、2006、『改訂 認知症の人のためのケアマネジメント センター方式の使い方・活かし方』、pp32、中央法規出版
12. 甘利てる代、2007、『介護施設で看取るということ』、pp219、三一書房
13. 前掲12 pp226
14. 山田律子、2013、『認知症の人の食事支援BOOK 食べる力を発揮できる環境づくり』、pp10、中央法規出版
15. 佐藤富士子、2012、『新・介護福祉士養成校座9 介護過程第2版』、pp20、中央法規出版
16. 前掲11 pp31-35
17. 前掲9
18. 桑田美代子、2013、「高齢者・認知症のエンド・オブ・ライフケア 認知症の人の世界に寄り添う」、『ホスピスケア』、24(2)、pp16-31

The Study of Closely Care at Special Nursing Homes for the Elderly

Masae Tanaka*

Abstract

The purpose of this study was to reveal what care workers who work at special nursing homes for the elderly consider as “closely care”.

A semi-structured interview survey was carried out among nine care workers. The interview data as independently analyzed by content analysis, yielding eight categories. These included: “comprehending a person's feelings when he can't express them in a good way and dealing with it” , “understanding a person from various view points if it is difficult to judge him from only his appearance” , “improving the relation ship between those living in a nursing home and their families, in a place different from their house” , “maintaining a proper relationship one step removed so as not to make elderly people uneasy, and give them time and space” , “development of kindness towards elderly people” , “undertaking thoughtful care to help ease the minds of elderly people in the familiarization to their new environments, which are unlike their homes” , “creating a support system for elderly people taking their tastes and schedules into consideration” , and “having as many care staff communicating with elderly people as possible” .

Key words: Closely care, Care worker, Special nursing home for the elderly

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Masae Tanaka
〒590-0014 2-8Tadei-Cho,Sakai-Ku,Sakai City,Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Care and Welfare
E-mail : m.tanaka@kenko-fukushi.ac.jp

